

## 「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」議事録

---

(開催要領)

1. 開催日時：令和2年12月20日(日)13:00~15:00
2. 場所：TKP 広島本通駅前カンファレンスセンター
3. 登壇者：  
総務省自治行政局 地域力創造グループ 地域自立応援課 課長 角田秀夫  
徳島大学 総合科学部 准教授 田口太郎  
島根県邑南町 地域みらい課 羽須美振興推進室 プロジェクトマネージャー 森田一平  
総務省 地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員 藤井裕也  
岡山県真庭市 地域おこし協力隊員 4代目リーダー 西本浩史  
島根県隠岐の島町役場 地域振興課 定住推進係 定住支援員 野一夢二  
兵庫県丹波篠山市 地域おこし協力隊 コーディネーター 合同会社ルーフス 代表 瀬戸大喜  
岡山県真庭市役所 総合政策部 交流定住推進課 主幹 小谷佳嗣  
岡山県真庭市 協力隊 OB 同協力隊相談員 松尾敏正  
兵庫県丹波篠山市 企画総務部 創造都市課 定住促進係 係長 垣内由起子

(プログラム)

1. 施策説明 角田秀夫
2. 基調講演「新型コロナウイルス感染症収束後の地域おこし協力隊や関係人口と地域づくりについて」 田口太郎
3. 事例発表「島根県邑南町が取り組む 課題解決×関係人口」 森田一平
4. トークセッション「地域おこし協力隊としての地域でのチャレンジ」  
ファシリテーター 藤井裕也  
パネリスト 西本浩史/野一夢二/瀬戸大喜
5. 自治体からの活動事例紹介  
岡山県真庭市 小谷佳嗣  
岡山県真庭市 松尾敏正  
岡山県真庭市 西本浩史  
島根県隠岐の島町 野一夢二  
兵庫県丹波篠山市 垣内由起子
6. 参加者による自治体への質問コーナー
7. 閉会

\* 敬称略・順不同

---

司会：

皆さん、こんにちは。「未来に向けて 知る・変わる・守る チームNEXT ステップ」シンポジウムをご視聴いただき、ありがとうございます。この時間は「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」と題して、広島県からインターネット配信によるオンラインシンポジウムをライブでお送りしていきます。本日の進行は私、おだしずえが務めさせていただきます。私は広島出身ですが、大阪と東京に仕事があって住んでおり、6年前に帰ってきました。帰ってきたときに、広島のことを勉強し直したら、すごくいいところだなと改めて思えるようになりました。ここから発信できることを誇りに思っています。最後までお付き合いください。

本来でしたら皆さんと一緒にシンポジウムを進めていきかけたのですが、新型コロナウイルス感染症防止の対策から、本日ご出演の皆さんは、リモートでご登壇いただきます。ご了承ください。

本日は「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」をテーマにシンポジウムを開催いたします。都市部に在住し、地域への移住を検討している方、関わりを望んでいる方に対し、関係人口取り組み団体の事例や、地域おこし協力隊などの活動を紹介していきます。ぜひ最後までご視聴ください。

それでは本日のプログラムをご紹介します。まずは施策について、総務省自治行政局地域力創造グループ、地域自立応援課課長、角田秀夫よりご説明いたします。次に基調講演として、「新型コロナウイルス感染症収束後の地域おこし協力隊や関係人口と地域づくりについて」、徳島大学総合科学部准教授、田口太郎様よりご講演いただきます。続いて、関係人口施策の優良事例として、邑南町地域みらい課羽須美振興推進室プロジェクトマネージャー、森田一平様よりご発表いただきます。その後は、「地域おこし協力隊としての地域でのチャレンジ」をテーマとして、地域おこし協力隊員の皆様、またOBの皆様によるトークセッションを行います。その後は、全国の自治体の皆様から、地域おこし協力隊の活動事例をご発表いただきます。そして最後は、事前に寄せられましたご質問に対して、ご登壇者の皆様からご返答していただきます。以上、本日のシンポジウムのプログラムのご紹介でした。

それでは初めに、今回のオンラインシンポジウムのテーマでもある「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」について、映像にてご紹介していきたいと思います。まずはこちらをご覧ください。

司会：

私自身も都市部からのUターン組ですが、早くから知っておけば良かったと思います。

今、都市部に住んでいる知人も興味を持っているので、本当に多くの人に知ってもらえればと思います。

それでは初めに施策について、総務省自治行政局地域力創造グループ、地域自立応援課課長、角田秀夫よりご説明いたします。なお本日、角田課長は東京よりリモートでご登壇いただきます。角田課長、よろしく願いいたします。

## 1. 施策説明

角田：

皆さん、こんにちは。総務省の地域自立応援課長の角田と申します。本日は「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」をご覧いただき、誠にありがとうございます。

今、地方では人口減少と高齢化が進んで、担い手不足が心配されています。そうした中で都会の人たちの力を借りて、地域おこしをしていこうという取り組みが進められており、国においてもそうした取り組みを支援しています。今回は地域おこし協力隊と関係人口について、施策の説明をしたいと思いますが、まず最初に、地域おこし協力隊について取材したVTRがありますので、そちらをご覧いただきたいと思います。

角田：

VTRを見ていただいて、地域おこし協力隊について、若干イメージが湧いたのではないかと思います。

それでは、私のほうから少し説明したいと思います。最初に地域おこし協力隊について、ご説明します。地域おこし協力隊は、都市地域から過疎地域の条件不利地域に実際に移住していただいて、地域における活動をしていただくという取り組みです。実施主体は市町村がやっており、概ね1年以上3年以下の期間で活動していただきます。

国としては、地域おこし協力隊をしている地方自治体に対して特別交付税措置ということで支援をしています。協力隊1人当たり440万円を上限に、特別交付税措置をしています。現在、5,500の方が地方において活動していただいております。先ほどのVTRにもありましたが、任期終了後、6割の方が同じ地域に定住しております。任期終了後、3割ぐらいの方が地域において起業しています。就農したり、地域において職を見つけて働いたりということで、OBも含めて地域において活躍いただいているということで、非常に評価を受けている制度です。

様々な活動があります。西会津町では伝統工芸の継承をしたり、農産物の特産化を進めたりという事業が行われています。OBの方も様々な暮らし方をして、地域に貢献されています。美作市では棚田の再生に取り組んでいる元隊員もいらっしゃいます。

続きまして、関係人口です。関係人口は比較的新しい言葉で、皆さん聞いたことがないかもしれませんが、定住人口ではなく、観光に来た交流人口でもなく、特定の地域に継続的に

多様な形で関わる者です。皆さん、いろいろな地域に関わっておられると思いますが、そういう地域において担い手として活動していただきたいということで、施策として進めているものです。

関係人口には段階があると思っております、地域との関わり、地域への思いと言う意味で、ステップアップしていただくことを目指して、地方団体では取り組みをしています。

分かりやすい例として、棚田のオーナー制度があります。耕作者がいなくなった棚田を、オーナーになっていただいて、田植えや稲刈りのときには手伝っていただき、お米を送るという取り組みが各地で行われています。これが関係人口の一つの例になります。

我々はモデル事業ということで、各地で様々な取り組みをしていますが、福井県坂井市の例です。ふるさと納税も一つの関係人口の形ですが、継続的にふるさと納税をしていただいた方に、「百口城主」ということで城主になっていただきます。さらに城主になっていただく方には、お城の活用方策等を考えてもらうというような取り組みが行われています。

続いて富山県高岡市ですが、高岡市は伝統工芸が盛んな町です。この伝統工芸をさらにステップアップするために、都会のクリエイターの人たちに関わっていただき、伝統工芸品のさらなる磨き上げをしてもらうという取り組みです。

こうした関係人口の取り組みは、各地で盛んに行われるようになってきています。以上、地域おこし協力隊あるいは関係人口の取り組みについては、ポータルサイトを設けておりますので、ご覧いただき、興味のある方はこうした取り組みに参加していただけるとありがたいと思います。私からは以上になります。ありがとうございました。

司会：

角田課長、ありがとうございました。

それではここで「新型コロナウイルス感染症収束後の地域おこし協力隊や関係人口と地域づくりについて」、徳島大学総合科学部准教授、田口太郎様よりご講演いただきます。なお本日田口様は、徳島県からリモートでのご登壇になります。それでは田口様、よろしくお願いたします。

## 2. 基調講演

田口：

こんにちは。只今ご紹介いただきました徳島大学の田口です。「新型コロナウイルス感染症収束後の地域おこし協力隊や関係人口と地域づくりについて」ということですが、なかなか難しいテーマと思いつつ、いろいろと考えたことをこれから発表させていただきます。

私も実際、徳島県内の農山村に移住している身からすると、地域社会がこの感染症によってどういう影響を受けたのかということ強く感じております。田舎の地域社会は、人が集まっているいろいろな議論を行ってきたという経緯がありますが、この集まるということ、人間の営みの基盤的なものだと思いますが、それがコロナウイルスの広がりによって否定され

てしまうのは、非常に大変なことだと思います。

一方、この30年ぐらいの地方の地域づくりで大きな役割を持ってきた都市農村交流みたいなものは、同質なものではなく、異なるものが集まることによって、新しい価値を生み出してきたという経緯がありますが、これも否定されてしまう。さらに高齢者や若者、子どもたち、子育て世代のお母さん方、いろいろな人たちが集まって、それぞれの思いを共有することによって、地域というものができあがったり、古い伝統が継承されてきたりした。これもなかなかできなくなってしまったというのが、新型コロナウイルスを受けた地域の大きな課題だと思います。

一方で、今回のシンポジウムもそうですが、オンラインが広く普及したということも実態としてあります。このオンラインをどう使うかということが、これからの地域づくりにおいても大きいのかなと思いつつ、ただ農山村は都市部や若者のように、すぐにオンラインに切り換えられるかというところでもないという難しいことがあるかと思っています。農山村では高齢者が非常に多いので、集まること、さらには感染症が広がってしまうことに対する警戒感が非常に強くなってしまったので、集まるのが都市以上に難しくなっている現状があるかと思っています。

オンラインというものに一つの可能性は見えてきていますが、やはり農山村の方々がすぐさまオンラインに乗り換えられるかというところもなかなか難しい現実があります。私の村もそうですが、この感染症が広がったことによって、毎月やっていた寄り合いや秋祭りが続々と中止になってしまいました。今までそれを生活のリズムとして考えていたような人たちが、そのリズムが狂ってしまってきたということも、大きな現実問題としてあります。これとどう向き合っていくかを考えていかなければいけない。ただもともとコロナウイルスが広がる前から地域は衰退していましたが、衰退するとはどういうことなのかということも、どこかで考えおかなければいけないと思っています。

非常に簡単な模式図をここに出しました。黄色い線は二次曲線的に減っていきませんが、人口の減り方を示します。それに対して青い線は、集落維持に必要な労力、つまり地域を維持していくのにどういう労力が必要かということを示したものです。

もともと1960、1970年代は、過疎化が始まっていたとはいえ、まだ人はたくさんいたので、労力は比較的しっかりありました。例えばお祭りの山車の上で太鼓を叩ける人は抽選で選ばれる人だけですよとか、長男だけですよとか、いろいろな条件があり、あるいは草刈りなどの出事も、1世帯1人でいいですよとなっていました。これも恐らくたくさんいた人口を、ある程度制御するための一つの仕組みだと考えることもできます。

ただ、現在はそれが下回ってしまっています。人口が下回ってしまうと、集落の維持ができなくなっているかというところ、しんどいとは言いつつ、なんとかできている。これはどういうことかと言うと、数少ない方々、この中でも意識の高い方々が人並み以上に頑張って地域を維持してきた。その代わりに、これが大きな負担になってきたことも事実です。この負担意識が地域の衰退圧力のようなものをつくっててしまう。今、地域づくりにはいろいろな取

り組みがあります。地元の人からすると、この負担感のようなものをどう解消していくのかを考えていかないと、なかなか前を向けない現実があるということは、ぜひ知っておいていただきたいと思います。

今年も2020年ですが、私は2022年を非常に心配しています。2022年というのは、昭和22年に生まれた団塊の世代の方々が75歳を迎える年です。いまだにいろいろな地域の人口ピラミッドを見ていると、団塊の世代の方々がかなり大きな役割を負っていることがよく見えてきます。地域においても自治会長や草刈りや農業など、かなり大きな戦力として団塊の世代の方々が活躍してくださっていますが、この方々も75を超え始めると、体力的に、あるいは気力の問題もだいが衰えてきてしまう。この人たちがさらに車の運転免許証の返納を始めてしまうと、地域の暮らしは立ち行かなくなります。75歳を迎えてしんどくなってから地域のことを考えると、気力も落ちてしまうので手遅れになってしまうのではないかと。2022年は地域の体力が一気に落ちてしまうということを、非常に懸念しています。そう考えると、実は時間はあまりありません。

こういったときにコロナが広がってしまった。本当はいろいろなことを検討していかなくてはいけないのに、それがストップしてしまったということで、気力・体力がますます低下してしまった。今までルーティンのようにずっと続けてきた寄り合いやお祭りなど、人が集まることもストップしてしまったので、一回やめて楽になったものをもう一度立て直すという、すごく難しくなっています。コロナ禍の収束、安定化とともに、これが落ち着いたときに、もう一度地域活動をどう再スタートできるかが重要なキーワードになってきていると思います。

ただこのときに、地域おこし協力隊の皆さんや、関係人口として地域の外から関わってくれる人たちの役割が大きいのではないかと。特に地域おこし協力隊の皆さんは、地域を極めて前向きに捉え、しかも地域で様々な活動をしてくださっている人たちです。この人たちにとっての地域のルーティンのようなことは、一つの価値だったりするわけです。この価値みたいなものを、もう一度どう光らせていくか、この働きかけをしていくのは、内部からはなかなか難しい。あるいは高齢化してしまっている社会側から動き出すのは非常に難しいので、地域おこし協力隊や関係人口の皆さんに期待される場所は大きいと考えております。

つい先日ミニサミットでもご講演いただいている小田切先生、あるいは地域おこし協力隊、関係人口の中でもかなり活躍されている稲垣文彦さんのモデルを出しておきます。一つは「三つの空洞化」というもので、地域の気力や集落の衰退は段階的に進んでいくことを示している小田切先生のモデルです。再生のプロセスのときに、伴走しながら地域の気力を前に向かっていくような足し算型のサポートと、ある程度自信がついた後に、どんどん化学反応を起こしていくような掛け算型サポートへの移行というものを、稲垣さんが出しております。この移行も大事ですが、ここの衰退のモデルから再生モデルへどう切り換えていくかも、大きな課題だと思っています。

左側に縮小均衡する地域。地域というものは、少しずつ衰退してくるということがある意味ルーティン化してきています。ここに全く関係なかったような人たちが、「コロナが収束したから前を向こうぜ」とポーンと働きかけてしまうと、地域の流れはポキッと折れてしまいます。ところが地域おこし協力隊や、関係人口の中でもかなり地域と信頼関係を築いているような人たちは、縮小均衡する地域と伴走しながら、信頼関係の輪をしっかりと結びつけている。こういった人たちが少し前に向けて、じわりじわりと切り換えていけるかどうかが、非常に重要なのではないか。

さらにそうすることによって、地域側が少しずつ前を向いていくことが重要で、向いていないと、外からいろいろなサポートの手が入っても、なかなか地域の人たちが一緒になって盛り上がっていくことが難しいという現実がありますので、この辺りをぜひ慎重に考えていただきたい。

ここに地域づくりの動機と書いております。地域の立ち位置を知る。今、地域ではいろいろな取り組みがあります。例えば地方創生で始まったような新しい起業であったり、ゲストハウスやカフェ、レストランがオープンしましたという話は、日本中の農山村でたくさん前向きな話題として聞きます。一方で、高齢者の車の運転がいよいよ厳しい、あるいはガソリンスタンドが撤退したけど、この先どうすればいいのかという、かなり切実な問題もたくさん聞きます。このずれが大きいのではないか。

左側に挙げているのが、心理学で有名なマズローが出している欲求段階です。右側にあるのは、この欲求段階を参考に、地域づくりを始める動機がどう位置付けられるか。地域の皆さん、特に自分たちの生活を維持するのが手いっぱいな高齢者の人たちの感覚と、今あちこちで行われている新しい産業や新しい価値をつくり出すような取り組みが、どういう位置付けにあるかということ、考え直さなければいけない。マズローの欲求段階で一番ベースにあるのは生理的欲求、つまり生存欲求と呼ばれるものです。今まさに死にそうなときに死にたくないと思う気持ちですが、それがある程度確保されると、安心・安全欲求になる。それが確保されると、所属・愛情欲求になる。尊敬欲求になって、最終的に自己実現を目指すことになります。

これは地域づくりにおいても似たようなことがあって、今、過疎化が進んで、課題が山積しているような地域の場合は、どちらかと言うと、この下のほうの基盤的なことがなかなか確保が難しい。例えば車の運転ができなくなってくると、生存問題に直結してきます。「車の運転の問題がすごく悩ましくて、それが課題なんだ」「農地の管理がもはやできない、しんどい」というような人たちに、「新しい6次化をやりましょう」と言ってもなかなかピンと来ない。地域で動いている取り組みと、実際地域の皆さんが抱えている課題認識が、どういう立ち位置にあるかということ、それぞれ認識して、このギャップを埋めるということ、を一方で考えていかないと、なかなかこの先難しいという現実があることを知っていただきたい。

地域おこし協力隊の皆さんは、当然地域で活動します。これは関係人口もそうですが、お

互いがお互いを上手に使い合うという関係がすごく重要です。そういう意味で、「地域で生かされる」あるいは「地域を生かす」ためとはどういうことなのか。「地域で生かされる」というのは、協力隊あるいは関係人口の皆さんが自己実現をしながら、先ほど動画の中で前職を生かした活動ができるという話がありましたが、前職を生かすということも、せつかく生身の人間が地域の中に入っていくということの一つの価値だと思います。様々なスキルや希望みたいなものと、地域がうまくマッチするためには、地域との関係をどうつくっていくかということです。

例えば地域の皆さんが、協力隊の皆さんあるいは関係人口の皆さんと信頼関係を築いて、お互い心を寄せ合うことができれば、お互い応援してあげようという気持ちができます。ただ、それができなければ、それが難しいわけです。こういうことができることによって、はじめて協力隊の皆さんも地域に対する希望や愛情が生まれていくし、それが結果として定住に結びついてくるのだと思います。

このようにするには、協力隊の皆さんあるいは関係人口の皆さんが、ただ自分がやりたいことを突き進んでいくということではなく、地域とどれだけ信頼関係を構築できるかが非常に重要になってきます。ただこのためには、協力隊の皆さんがどれだけ努力をするかという話だけではなく、受け入れる地域の皆さんにも、協力隊の人たちとどういう関係づくりをしていくかということをよく考えてもらう必要がある。ここで地域の皆さんと協力隊の皆さんが、それぞれ共通認識を持てるかどうかということが大きなテーマになってくると思っています。

地域おこし協力隊の皆さんの場合、「結局、定住するの？」とよく言われます。あるいは関係人口としてこれから地域に関わる人たちも、「結局あなたは移住する気があるの？」と言われるかもしれない。ただ、ぜひ考えていただきたいのは、定住すれば地域が良くなるかということ、そうでもない。住まなくても地域が良くなることもあるし、住んでいても地域が良くなることもある。これは何かということ、結局暮らしであつたり、日々の生活の中で地域に貢献しようという気持ちや、あるいは行動がなければ、地域にとってはあまりメリットがありません。

地域の貢献をどう理解するか。一つは、地域住民からの信頼かもしれない。あるいは地域社会の一員としての責任かもしれない。ときどき、「とにかく移住してくれればいいよ」という行政もなくはないですが、行政の皆さんからすると、どうしても成果を上げなくてはいけないということで、鉛筆をなめて「これは成果です」と言うことがあるかもしれませんが、書類上の成果と地域の評価が異なることがあります。やはり一番重要なのは、地域側の評価ではないかと私は考えていますので、皆さんも、リーダー層ではなくていろいろな人たちとの信頼関係をどう構築するかということをよく考えて、この活動をしていただけるとありがたいと思います。

さらにこういう信頼関係ができてくると、絶対的に定住しなくてはいけないかということ、いろいろな理由で定住できなかったとしても、地域の近くに住んで定期的に通うことも可



能かもしれませんし、あるいは東京、大阪、福岡など、地域の大都市に住まざるを得ないけれども、都市の側から地域を一生懸命応援することも今の時代は可能です。貢献の仕方には、住む以外にもいろいろな可能性があるということは、ぜひ知っていただきたい。

逆に地域に住んでいても、地域とあまり良い関係を築かない人もいらっしゃいます。今までは住んでいる人たちが良き担い手と位置付けられてきましたが、現在の社会は、住んでいても貢献しない人もいれば、住んでいなくても貢献する人もいるわけです。多様な関わり方が実際にあります。その中で、地域の担い手がどういうところにいるかをよく考える。これも協力隊の皆さんのみならず、できれば地域のおじさん、おばさんたちにも、単純に住まなくても、いろいろな貢献の仕方があることを知っていただきたいと思います。

今ここに濃い緑、薄い緑、さらに薄い緑の三つを挙げていますが、これまで地域の担い手として位置付けられてきた人たちは、この一番右側の濃い緑の人たちが住みながらできることと位置付けられてきました。ただ、今は道路が非常に良くなってきたこともあるので、近くの都市部に住んで通うということも、非常に簡単になってきています。先日私は農業センサスというもので、農業集落から人口集中地域への時間・距離の統計を調べると、1時間以内に行ける人たちがかなり増えてきています。そう考えると、今までのように、農村と都市は別の存在ではなく、行き来する存在であってもいいわけです。さらにインターネットも普及してきましたし、もっと言うならば、LCCもあって人の移動が簡単になってきています。そう考えると、都市部にいてもできることはいろいろあります。

それぞれの人たちを地域の担い手として認識をするのか、あるいは地域の外に出ていってしまった人として認識をするのかによって、地域の可能性は大きく変わっていくのではないかと考えています。例えば地域からいろいろな事情があつて出ていってしまった人たちを、「あいつは駄目だった」と考えるのではなく、「外にいても一緒にやっついこうね」と思える地域になれるか、もっと言うならば、そういう人間関係を地域の皆さんと築いていくことができるかということが問われているのかなと私は考えています。

例えば地域に住んでいる人たちだけを認識していると、小さな枠の中に地域の担い手が存在していました。これから人口が減っていく、これは日本中の人口が減るので、地域の人口だけ増えるというわけにはなかなかいかないことがあります。皆さんも地域おこし協力隊をやっていると、「定住するの?」と言われてしまいますが、定住しなくてもいろいろな関わり方があるよねとか、都市部にいる関係人口の皆さんとの協働みたいなものが、どういうふうに地域に成果として出てくるかということを、きちんと地域の人たちに伝えることができれば、ひょっとすると地域側の見方も変わってくるかもしれない。これをどう捉えるかが重要だと思います。

お配りした資料の先のほうに行くと、関係人口を考えるというところがあります。今、関係人口の存在が大事にされていますが、都市側から見るのか、地域側から見るのかによって、だいぶ捉え方が変わってきます。なぜかと言うと、都市の人たちからすると、都市の生活が非常に苦しいということもあり、自分たちの大変な東京の暮らしを良くしようと思って、農

村というものを選ぶ。週末の田舎暮らしを選ぶ人たちも当然います。逆に地域からやむを得ない理由で外に出てしまったけど、どうしても地域の責任や役割を果たしたいという気持ちがあって、地域に関わってくれる人も中にはいらっしゃいます。どこを向いている外部者なのかということを見るだけでも、考え方は変わってきます。

単純に外から来てくれる関係人口の人たちは、なんでも同じように対応するのではなくて、地域のことを大切に思ってくれるような人たちを中心に据え、逆に言うと、最初は都市の暮らしを良くしようという気持ちで関わってくれた人たちも、地域にとっていいというのはどういうことかということをお伝えして、少しずつ地域を中心に据える方向にたぐり寄せていくことができれば、地域の側にもメリットがあるのかなと思っています。ただこのためには、地域としてどういう戦略を持つのか、どういう思いを持って外部者と付き合っていくのかということにも、かなり依存することが多々あったりします。

今、行政を中心に関係人口をどんどんつくっていこうということが、取り組みとして行われていきます。ただ関係というのは人と人の間ですよ。間の関係性を示す言葉ですので、当然自治体にとっての関係人口と、集落だったり、個人だったり、そういう人たちにとっての関係人口というのは、必ずしも一致しない。これはいろいろなレイヤーが重なっていると考えていただいたほうがいいのかと思います。

「自治体の関係人口だから、地域にとっても関係人口なんですよ」と単純に考えるのではなくて、逆に「俺の知り合いだから地域全体の関係人口ですよ」と考えるのではなくて、個人の関係人口だったら、そこに地域の人たちもたくさん紹介して行って、地域の関係人口にどう切り換えられるか。逆に言うと、組織としての関係人口を、実際の地域に連れていくことによって、さらには実際の地域の個々人とつなぐことによって、それをどうスケールダウンしていくかというように、多層的なものにどう切り換えていけるかということがすごく重要ですので、今、自分たちにとってイメージできている関係人口は、どのレベルでの関係人口で、これをどちらの方向に向けていかなければいけないのかということは、それぞれの地域でぜひ考えていただけるとありがたいと思います。

今日のテーマである地域おこし協力隊と関係人口というのは、コロナ後のことも考えると、どういう可能性があるのかについて、お話ししたいと思います。今まで外の人たちとの交流をやってきた地域は、それほど多くありません。ところが地域おこし協力隊の皆さんが地域にどんどん入っていったことによって、地域の皆さんにとって、外部から来る人はかなり身近な存在になってくると思います。特に地域おこし協力隊の皆さんのように、地域の方々と積極的に交流し、一緒に取り組むことによって、地域が少し前向きになっていく。この経験値は、地域おこし協力隊にかぎらず、外の人たちとどういうふうに付き合っていけばいいのか、どういう感覚になるのかということ、地域の人たちが体験的に知るいい機会になっていると思います。

協力隊の皆さんは、外部の人たちとどう付き合っていけばいいか分からなかった人たちと積極的にコミュニケーションを取っていただいて、「変な人たちじゃないんだな。こうい

う人たちと付き合っていたら、結構面白いことが起きるんだな」ということを体験的に地域の皆さんに知っていただくことが、すごく大事ななことかと思っています。

特に今コロナによって、都市農村交流がほぼストップしているのが現状だと思います。地域おこし協力隊の皆さんからすると、みんなで集まってイベントをやったりすることが難しいこともあり、活動をどうしていったらいいかと悩んでいるところだと思います。何か大きなことはやらなくてもいいと思います。例えば集落の中を歩いていくときに、ちょっとした挨拶であったり、自分たちが一生懸命暮らしている姿を地域の人たちに見せることによって、地域の人たちと小さな信頼関係をたくさん結んでいく。そうしていくと、協力隊の皆さんの言葉を聞いてくれるようになってくる。

この関係性をきちんとメンテナンスするかどうかがとても重要ですし、その結果、地域の人たちも関係人口というもっと広い領域に視野を向けられるかどうかという点で、すごく大事なことです。そういう意味でいうと、自分中心ではなくて、地域を主語にできるかどうかということが、協力隊の皆さんからするとなかなか難しい面もあるとは思いますが、とはいえ、税金として地域おこしをやっていこうという施策ですから、ぜひ地域のことを大切に信頼関係をつくる。その上で、自己のビジョンと地域の協働というもののバランスを上手に取っていただくのが、大事なことかと思っています。

こういうイメージを地域と共有することができれば、「あいつはああいうことをやってるけど、自分たちと全然関係なさそうで、実はつながっているんだ」ということを、地域の人たちも考えられますし、特にコロナから再出発するとき、地域おこし協力隊の皆さんが働きかけると、「確かにあなたたちが来たときの感覚をもう一回取り戻したいな」という気持ちに地域の人たちがなれるかどうか、すごく大事です。そのためには、地域の人たちがどういう未来を描いているのか、あるいは協力隊の皆さんがどういう未来を描いているのかということ、地域の皆さんとどうすり合わせをしていくのか。信頼関係をじっくり深めていく、熟成させていく期間として、このコロナの時間を使っていただけるといいのかな。

その上で、これからさらに多様化する関係性を、どう地域が上手に戦略的に使っていくかということ、今のうちから温めて、そういう関係性をつくっていくと、冒頭に申し上げたような2022年に高齢化が一気に進むときに、自分たちではできなくなってくるものがどんどん出てきます。アイデアが不足してしまうことも、たくさん出てきます。こうする中で、関係人口や外部の人たちの力や知恵を、自分たちなりにどう使っていけるかということ、考えるための準備をする。そういうことをしていくと、この先が有効に働いていくのではないかと、私個人としては考えていますし、私自身も農村で暮らしていて、地域の皆さんと話していく中で、こういうことを働きかけていくのが、今、外から来ている人たちの一つの役割なのではないかと考えている次第です。

非常に短い時間ではありましたが、冒頭の話提供ということで、今、私なりに考えていることを表明させていただきました。ありがとうございました。

司会：

田口様、ありがとうございました。

続いては、関係人口施策の優良事例として、邑南町地域みらい課羽須美振興推進室、プロジェクトマネージャー、森田一平様よりご発表いただきます。なお本日森田様は、島根県からリモートでのご登壇になります。それでは森田様、よろしくお願いいたします。

### 3. 事例発表

森田：

島根県邑南町の森田と申します。皆さん、こんにちは。邑南町は先週雪が降りまして、今日も寒いですが、邑南町の取り組みを聞いていただきます。優良事例と言っていたのですが、厳しい条件の中でいろいろあがいていますので、そういった一つのチャレンジの事例として聞いていただければと思います。よろしくお願いいたします。

「島根県邑南町が取り組む課題解決×関係人口」について、お話をさせていただきます。私自身も4年前にUターンしてきて、今、役場で働きながら地域づくりに取り組んでいるところです。

邑南町は島根県のほぼ真ん中の山の中、広島県に接するところにあります。私が担当しているのは、昔、羽須美村という東の端の過疎化が進んでいる地域です。戦後7,000人弱いた人口が、今、1,400人を切る状況になっています。高齢化率も56%になります。地域の担い手が不足してきて、地域全体に諦め感が漂っているというのが、隠しようのない事実かと思っています。

そういったときに、この地域を通るJR三江線が廃止になりました。2年前のことですが、これが地域の重要な交通インフラでもありましたし、廃線というものが、この地域の衰退の一つの象徴的な出来事として、また人々の気持ちを萎えさせてしまうような出来事でした。

ただこの廃線に至る過程で、三江線のファン、最後に乗りたいという人たちが地域をどんどん訪れるようになりました。鉄道が大好きで、廃線前に一度乗ってみたいという人たちが多かったと思いますが、その中で何度も何度もこの地域に通ってくださって、廃線後の活用について地域の人たちが考え始めたときに、一緒にそのことを考えてみたいという人たちが現れてきました。

そのときにちょうど、総務省の「関係人口創出事業」の募集があり、廃線の翌年でしたが、この関係人口の事業にチャレンジをしようということでした。課題としては、地域の人口が減少しており、先ほど田口先生のお話にもありましたように、担い手がどんどん減っていくと、新しいことにチャレンジをしようとする余裕が住民の中から失われていって、自分たちの地域を守ることで精いっぱいという気持ちだったと思います。新しい活動を起こそうといったときに、地域の住民だけではマンパワーが足りない、知恵も足りないということで、地域の外に住みながら、地域に関わってもらって関係人口を迎えて、地域再生に取り組んでいきたいと考えました。

三江線の跡地の活用に向かって、地元で NPO が立ち上がりました。三江線の跡地の活用について、地域の取り組みを応援してくれるマンパワーを必要としていましたし、いろいろなアイデアをいただきたいと思っていました。プロジェクトとしては、廃線の跡地を活用して、観光で賑わいを創出できるかどうかという課題を設定してみました。

このトロッコの写真ですが、ヘルメットをかぶって運転をしているのが地元の NPO の人で、通常はお客さんが乗っています。これが今までの交流人口だったと思いますが、ホームで手を振っている女性たちは、広島から通ってきてくださっている方で、鉄道が大好きだったり、鉄道の文化を非常に愛してくれている人で、こういった人たちとのコラボレーションで、廃線の跡にトロッコを走らせるという事業が今も続いており、この関係は今も続いており、コロナの中で限定された形ではありますが、今でも支えてくださっています。

もう一つ、天空の駅と呼ばれている宇都井駅がありますが、ここで「INAKA イルミ」というイベントをやっていました。廃線を機に、このイベントをやめようという空気もありましたが、ここでもう一度チャレンジをしてみようということになり、これを課題の一つとして設定しました。

住民の人も頑張るけど、それだけでは人が足りないということで、住民と関係性を求める若者たちが来てくれました。地域の人とのつながりが満足感につながり、住民も外から応援して下さる人の存在で、もう一度頑張ろうという気持ちになってくれていると思います。その事業のときもいろいろ参加してくださいましたし、19年、20年と続けて参加してくださっています。

来られた方にアンケートを取りました。「どんな動機で来られましたか」とたずねたところ、「住民の想いを応援したい」「地域資源に愛着がある」、この地域資源が鉄道になりますが、鉄道が好きな人にとって、ここが自分が関われる場所だという思いを持ってくださっているのかなと思います。「地域課題の解決に貢献したい」「住民とのつながりを維持・継続したい」という四つの動機が大きくクローズアップされました。自分たちがこの地域で廃線活用という課題を設定したときに、鉄道をなんとかしたい、鉄道に関わりたいと関心を持ってくださっている鉄道ファンの皆さんが関係人口となり、そのことによって地域が再生していくというモデルを、これからも続けていければと思っています。

これは「INAKA イルミ」の片付けが終わった後、住民の人、鉄道ファン、若い学生たちがみんなで撮った写真で、私も大好きな写真です。こういった形で、関係人口と地域が一緒になって元気になっていけるとと思っています。

今、「おおなん DIY 木の学校」も始めています。田舎ですごく素敵な古民家がありますが、これが空き家になって放置されているので、これに関わってくれる人は誰かと考えたところ、DIY が大好きな人たちがいるじゃないかと考えました。廃線の跡の活用と鉄道ファンという組み合わせ、空き家の活用と DIY 愛好家といった形で、動機を持った人たちが私たちが見つけてくる形を考えたところです。

「DIY 木の学校」を運営しながら、地域の空き家を現場にしながら、活動を続けています。

ここでの課題設定は空き家の活用で、関心層がDIYの愛好家で、関係人口の取り組みによって、地域も再生していくというモデルを考えました。

私たちが目指す一つの形として、関係人口と地域のつながりがなかなか難しいという先ほどの田口先生のお話もありましたが、私たちとしては解決する課題と関わりしるを設定し、そこに関心を持つ関係人口を地域へいざない、関係人口が地域貢献に満足感を覚えているだけでことになると、諦めかけていた住民もやる気を再生していく。そういった「面白い・関わりたい」という地域に変化したときに、人生の全てではなくて、一部でも過ごす場として、この羽須美地域を選んでくださる人が増えてくれるのではないかと考えています。住民、移住者、関係人口が行き交う賑やかな地域になっていくということが、私たちが目指す関係人口と協働した地域の姿だと思っております。

お話は以上です。劇的に何かが変わったというわけではないですが、田口先生のお話にもありましたように、住民の気持ち少しずつでも前向きになって、諦めかけていた住民たちが希望を持ってくださり、そこにまた関係人口や移住者を迎えることができる、そんな地域になりたいと思って頑張っているところです。今日はこのような形で登場させていただき、ありがとうございました。以上です。

司会：

森田様、どうもありがとうございました。厳しい中での様々な取り組み、心がとても動かされます。

この後は、地域おこし協力隊員の皆様、OBの皆様による「地域おこし協力隊としての地域でのチャレンジ」をテーマとしたトークセッションを行います。準備が整うまで、本日の開催地、広島県について映像でご紹介します。ご覧ください。

(映像)

司会：

ご覧いただき、ありがとうございます。海があって山があって、おいしいものがある、本当にいいところです。落ち着いたら、来てください。お待ちしております。

それでは、ここからは地域おこし協力隊の皆様、OBの皆様によるトークセッションを行っていただきます。ご登壇の皆様をご紹介します。ファシリテーターを務めていただきますのは、総務省地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員、藤井裕也様。なお藤井様は、岡山からリモートでのご登壇になります。よろしくお願いいたします。

#### 4. トークセッション

藤井：

皆様、はじめまして。地域おこし協力隊サポートデスクの藤井と申します。今日はファシ

リテーターを務めさせていただきます。本日は地域おこし協力隊としての地域のチャレンジというテーマで、今日は現役隊員の方、OG、OBの方と一緒にトークセッションをさせていただきます。皆様、よろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。続いて、パネリストの皆様のご紹介です。真庭市地域おこし協力隊員4代目リーダー、西本浩史様。なお西本様は、同じく岡山県からリモートでのご登壇になります。隠岐の島町役場地域振興課定住推進係定住支援員、野一夢二様。なお野一様は、島根県からリモートでのご登壇になります。丹波篠山市地域おこし協力隊コーディネーター、合同会社ルーフス代表、瀬戸大喜様。なお瀬戸様は、兵庫県からリモートでのご登壇になります。それではここからはファシリテーターの藤井様、よろしくお願いいたします。

藤井：

よろしくお願いいたします。それではトークセッションを始めていきたいと思います。まずは登壇する皆さんから自己紹介をしていただこうと思います。まず真庭市の西本様から、自己紹介をお願いします。

西本：

皆さん、よろしくお願いいたします。岡山県真庭市の地域おこし協力隊4代目リーダーをしております西本浩史と申します。前職は北海道で教育公務員をやっておりました。今、活動は真庭市全域を担当しております。活動内容は福祉をメインにしていますが、障がい者の方や高齢者の方と一緒にサロンで活動させていただいたり、地域の皆さんと一緒に空き家の改修をしたり、地元のケーブルテレビのバラエティー番組の企画・出演もしたり、多分野で活動しています。以上です。

藤井：

続きまして、隠岐の島町から野一さん、よろしくお願いいたします。

野一：

島根県の離島、隠岐の島町役場地域振興課定住推進係で、定住支援員として活動している野一と申します。よろしくお願いいたします。

元は神奈川県出身で、前職はゲーム会社でフリーランスをされており、隠岐の島町に移ってきてからも、リモートで東京のゲーム会社と仕事をしながら、地域おこし協力隊をやっております。「ゲーム×地域振興」ということで、ちょっと特殊な活動をされており、国境離島初のボードゲームカフェを開店しようと思っています。これは後ほどトークセッションで触れると思いますので、今はこの程度で控えさせていただきます。よろしくお願いいたします。

藤井：

ありがとうございます。続きまして、兵庫県丹波篠山市の瀬戸さん、今日はOBとして出演いただくということで、自己紹介をお願いいたします。

瀬戸：

お願いします。兵庫県丹波篠山市の元地域おこし協力隊の瀬戸大喜といいます。出身は京都府で、神戸大学からファーストキャリアとして地域おこし協力隊を選びました。大学との距離は車で1時間ぐらいですが、通いながら協力隊をして、任期後は学習支援事業や、鍼灸師の専門学校に通うなど、そのようなキャリアを踏んでおります。今日はどうぞよろしくお願いします。

藤井：

ありがとうございました。3名に自己紹介していただきました。

今日見ている方は、協力隊になろうとか、関心がある方、移住を考えている方が多いと思いますので、協力隊になったきっかけについて、それぞれ聞いてみたいと思います。西本さんからお願いいたします。

西本：

私、実は真庭市が地元で、北海道に住んでいた頃ですが、地元真庭市に帰ってきたときに、市役所の中で移住フェアをされていました。たまたまそこに参加したときに、協力隊の方がブースを出されていて、協力隊の先輩のお話を聞いているうちにワクワクが止まらなくなったというのがまず一つです。そこから他の自治体の協力隊のことも調べましたが、特に真庭市は協力隊同士もそうですし、行政の方ともすごく仲がいいというのを聞いていくうちに、そして先輩方のキラキラを思い出していくうちに、「これは真庭市だな」ということで、真庭市の地域おこし協力隊を選びました。

藤井：

ありがとうございます。続いて、野一さん、お願いします。

野一：

協力隊になったきっかけですが、僕は昔から田舎に旅するのが好きだったのですが、田舎に行って山にハイキングをしたら、その山の頂上の休憩所でゲームをつくったり、離島に旅する船の中でドット絵をポツポツ打ったり、そういう活動が好きで、アウトドア寄りインドア派ということで活動しておりました。

そのときの経験から、いつか離島に住んで、ゲーム会社を興したいと思っていたのですが、



実際に移住するとなると、生活の利便性みたいなところは捨て切れないと思い、昔、日本一周をしていた経験から、Google マップを見ると、その島の生活規模や物価が推測できるような能力が身に付いており、全国のいろいろな島を調べたのですが、不便と便利のバランスが一番ちょうど良かったのが隠岐の島町だったということで、隠岐の島町の協力隊に応募しました。

藤井：

ありがとうございます。面白いですね。瀬戸さん、よろしくお願いします。

瀬戸：

僕は先ほどの自己紹介でもあったとおり、神戸大学の学生のとくに、協力隊になりました。農学部で実践農学という授業があるのですが、学生が1時間かけてバスに乗って、農家さんに弟子入りしたり、地域課題の解決に向けて、何か学生でできないかということで、ゼミや授業で通う中で、地域の方に顔を覚えていただいて、正直当時は何も持たない学生であった自分にも、できることがあるのだなと感じる中で、もっと踏み込んだ活動してみたいと思うようになりました。

丹波篠山市は神戸大学との連携協定の中で制度がつくられたという経緯があり、週3日、協力隊として働くという半学半域型という制度が2014年に立ち上がり、その1期生として僕は手を上げて活動を始めたという経緯になっています。

藤井：

ありがとうございました。来る方によって、いろいろなきっかけが千差万別であると思います。

続きまして、地域の印象について聞いてみたいと思います。来たい人からの相談として、着任する前と後で印象が違うとか、入ってみて初めて分かったこともたくさんあると思います。着任されてからの地域の印象、気があれば、お話しいただければと思います。西本さんからお願いします。

西本：

人に関して言うと、協力隊は1人で活動していくのかとずっと思っていたのですが、地域おこし協力隊に入って、地域づくりを地域でしている方もしていない方も、「みんな連携して、何か面白いことをやって、この地域を盛り上げていこうぜ」みたいな雰囲気、真庭市はすごく強いと感じました。今日この会場にもなっていますが、真庭市地域おこし協力隊の本部、真庭市交流定住センターという場所ですが、地域の交流拠点の場所にもなっているので、その存在も非常に大きいかなと感じています。

ここには地域活動をしている方も、していない方も、様々な方が来られますが、ここに集

まることで、この場所から何か生まれたり、何か新しいことが始まったりすることがあります。着任してみて一番強く感じたのは、地域、行政、地域おこし協力隊という横のつながりが非常に強く、連携一体感、チームワークは非常にいいなと感じました。

藤井：

真庭市の一体感は、行きたい方も多いのではないかと思います。次は、野一さん、いかがでしょうか。

野一：

移住してみて最高の一言に尽きます。というのも、離島という場所は、行ったことない方は肌感として持っていないかもしれませんが、独特の時間感覚が流れており、本土の田舎ともまた違ったゆったりした時間が流れているところで、特にクリエイターさんや手に職を持っている方が移住されるのに向いているのではないかと、移住してみて特に思っているところです。今年は、僕の活動として、世界的に有名なゲームとコラボ事業を行いました、それに代表されるように、まだまだ隠岐の島町はコラボできる余地があるのに、まだ活用し切れていないような、埋蔵金のようなものが、まだまだ埋まっているのではないかと感じているところです。

藤井：

埋蔵金という言葉、非常にインパクトありますね。ありがとうございます。続きまして、瀬戸さん、お願いします。

瀬戸：

お二人からいい話が続いたので、課題寄りの話をしようかと思いますが、まず僕が入った当時は学生だったので、本当に社会人としての常識もまだわきまえていないみたいな状況もあったのも絡むかと思いますが、話の筋の通し方がすごく大事ななと思ったのが着任後の地域の印象です。

協力隊は何か地域に変化を起こすことが求められる役割かなと思いますが、例えば新たなイベントを立ち上げるという際に、自治会長さんや、丹波篠山市の場合はまちづくり協議会の会長さんなどの耳に、何かイベントしますよと、広報の前に、企画段階で情報が入っているかどうか、その後地域の方々から協力を得られるか、応援してもらえるか、参加してもらえるかというところにつながるのかなと感じています。

その中で、丹波篠山市では、神戸大学がコーディネーターという形で、専門性を持ちながら活動支援を行っていただけるところが非常に助かったなと思っていて、今は僕が支援される立場から、立場を変えて協力隊のコーディネーターとして、活動支援や制度づくりを行っています。協力隊は毎週ミーティングを行って、情報共有切磋琢磨行っているんですけれ

ども、孤独感を感じないところも大事なポイントかなと思っています。後で丹波篠山市の職員さんから登壇がありますが、その職員さんとも毎月膝を突き合わせて、2時間以上議論しながら、地域おこし協力隊や、地域にとってベストな制度の運用は何なのかを探って進めているというのは、丹波篠山市の一つの特徴かなと思っています。

藤井：

ありがとうございます。地域の間人関係をしっかり押さえながら話を通さないとうまく行かないこともある、これも失敗経験などをしながら、隊員もいろいろと勉強しながらやってきているところだなと思っています。それも、入る前になかなか分からなかったが、入った後分かることの一つかなと思いました。ありがとうございます。

続きまして、今日は地域おこし協力隊としての地域のチャレンジということでテーマが設定されていまして、今日はお三方から、協力隊としてのチャレンジ、日々いろいろな取り組みを協力隊は、トライアンドエラーをしながらやってきていると思いますが、そのエピソードをお話しいただきたいと思っています。特に経験者の方々なので、リアルなお話も聞けるのではないかと考えています。

それでは最初に、瀬戸さんから、エピソード、チャレンジについてお話しいただければと思います。いかがでしょうか。

瀬戸：

ありがとうございます。今は本業、地域おこし協力隊コーディネーターと、その一方で学習支援事業ということで、それを行う合同会社ルーフスの代表として経営を行っています。協力隊任期中には、1年目から会社を立ち上げて、ローカルベンチャー企業みたいな感じで、様々な事業を農村部で立ち上げるということをやってきました。その中で、農村部での仕事の生まれ方にすごく特徴があるなと感じていて、一番大事なポイントが「信頼されるのが大事である」ということだと思っています。

田舎には仕事がないみたいに言われることもあると思いますが、実はそうではなくて、困りごとはたくさんあるが、それを仕事化する人がいないという状況なのかな、起業家が少ないというのが田舎の現状なのかなと思っています。ただ、同じ事業をフルタイムで行うという規模のニーズはなかなか少ないところがあるので、幾つかの仕事を組み合わせてリスクを分散しながら生きていくというモデルが田舎には適しているのかなと感じています。

さらに何か事業を立ち上げる上で、初期投資や、生活コストを抑えるお得なスタートをさせるというのがすごく継続のコツかなと思っています。そのためには情報が必要だと思いますが、田舎というのは情報がオンライン化されていないことがすごく多いので、「誰々さんが知っている」「誰々さんから聞いた」みたいなことがすごく多い。例えば空き家の情報や仕事の情報、いろいろな情報がオンライン化されていないことが多いので、その意味で、いろいろな方から信頼を得ておいて、そこから常に質のいい情報が入ってくる環境がくれ

るかどうかが、事業を立ち上げる上ではすごく大事なポイントかなと思っています。

それが田舎で活動を始めると目のハードルだと思いますが、それを協力隊制度というもので埋めることができるのではないかなと思っています。

藤井：

なるほど。ありがとうございます。ちなみに瀬戸さん、「信頼、信用を勝ち取ることが難しい、それがなくなかなか前に進めないよ」という話があったと思いますが、そこを勝ち取るためにやったことや、逆に「この辺心掛けてこういう活動したよ」というエピソードがあったらお話ししたいのですが。

瀬戸：

ありがとうございます。地域の方と一緒にイベントなど何かを成し遂げることがすごく重要かなと思っています、今の文脈から全然想像がつかないかもしれませんが、僕は協力隊当時、活動内容としては、小さな水車で水力発電でエネルギーを賄おうといった活動をしていました。水車というのは地域に昔からある、でも子どもたちも仕組みを理解しやすいみたいな感じで、多世代型の交流を生み出しやすいアイテムだったと思っています、水車を一緒につくるところから工業系の高校生たちを巻き込んで、「マイクロ水力発電アイデアコンテスト」みたいな100人規模のイベントをドンとやったのですが、その辺りを地域の方と一緒に組み立ててやっていくことによって、確たる信頼が得られていったのかなと感じています。

藤井：

ありがとうございます。続いて野一さん、お願いします。

野一：

僕は先ほど自己紹介でも申し上げましたとおり、ゲーム会社を立てようと思って、最初から起業目的で移住してきたのですが、ただ、田舎に移住してきてみて、やっぱりゲームって異質な文化なんですね。全く未知のものなので、これを受け入れていただくのは非常に難しいことですので、協力隊の活動期間中は、ゲームというのはいかに安全なものかというのを、ゲームに対する「ゲームイコール悪」みたいな誤解を解いていくような活動に従事しようと思ひまして、いろいろ活動をしています。

今年一番大きな活動としては「東方隠岐誉」という、皆さんご存じかどうか分かりませんが、『東方 Project』という世界的に人気なゲームとコラボしまして、オリジナルラベルのお酒をつくらうということで、お酒1本にコースターを付けて9,800円という、お酒飲まれる方はかなりの高額だとお分かりだと思いますが、それで売りまして、限定100本でつくりましたが、平日の昼間にもかかわらず4分で完売しました。最初お話を持ってきたとき、地元企業の方もちょっと渋い顔をされていましたが、実績が上がってからは「第二

弾もやろうよ」みたいな、ノリノリで次の事業の話をするようになるなど、そのような感じでゲームに対する誤解みたいなものを解く仕事をしています。

藤井：

ありがとうございました。野一さんの経験とこれまでの蓄積と地域の資源を合わせた、すごくいいプロジェクトだなと思います。続いて西本さん、お願いします。

西本：

私は最初「福祉の分野で活動します」といって面接でも入ったのですが、障がい者福祉という部分をメインで活動していたのですが、高齢者のこともやっていたし、福祉という部分をやっていたつもりだったのですが、今は地域の方と一緒に空き家の改修をしたり、使われていなかった畑をお借りすることができたので、そこで障がいがある方と一緒に何か活動ができたらいいなと思って、畑の作業をするようになったり、あと先ほども言ったように、地元ケーブルテレビの企画出演を試みたり、あと今は協力隊通信の冊子も作っていますが、そういうことをいろいろしていったら、一体自分が何屋なのか分からなくなっていったのですが、実は福祉という言葉は、辞書などで意味を調べると、幸せという意味につながるんですね。なので、地域活動は人々の幸せを模索して何かつくるような仕事なのかなと思っていたときに、地域おこし協力隊の活動と福祉というのは、意外と密接な関係があるのではないかなと気づきました。

なので、今自分がやっているこの活動、チャレンジして地域の方と一緒にやっている活動というのは、全て地域の方の幸せにつながっていくのではないかな。なので、自分が最初に入った福祉という部分に関しては何も間違っていないと思うようになってから、今はもう胸を張っていろいろな地域活動やいろいろなことにチャレンジするようにしています。以上です。

藤井：

ありがとうございます。続いて、今ちょうどコロナ禍で、いろいろな協力隊の活動にも全国的に影響が出ていると思いますが、コロナがある中での何か活動の変化などがあれば伺いたいと思っていまして、西本さん、いかがですか、真庭では何か変化はありましたか。

西本：

私、もともと協力隊活動を始めるにあたって、3年間しかないのだから、年単位で活動をこうしていこうという方針を考えていました。1年目は、地域に入って本当の地域の課題やニーズを調べていこう。2年目になると、その本当に地域の課題やニーズを、地域の人たちと一緒にアプローチしていこう。3年目は、アプローチしたものを他の自治体の方や活躍されている方、あとは他の自治体の協力隊員と一緒に連携して、うまく活動につなげていけたらいい

いなと思っていました。

私は何かつくったり売ったりする活動ではなくて、人と会うのが大前提の活動なので、やはりこのコロナ禍というところで大きく活動が止まりました。そこで考えたのが、思い切って活動の方針を、2年目と3年目を入れ替えてしまえと思って、入れ替えました。方針転換をしました。今コロナ禍において、オンラインというもので、人と会うことがすごく簡単になってきています。私もあまりそういう部分が得意ではありませんでしたが、思い切ってオンライン上で人と会おうというところから、今年の3月、中四国エリアのオンラインイベントの総合司会をしましたが、それをきっかけに、今は岡山県の地域おこし協力隊ネットワーク主催のオンライン交流会を月に1回やっています、その司会進行をしています。

なぜそれをやっているのかということなのですが、今できることを考えて、そこから地域貢献に向けてどう方策を練るかというのを、オンライン上で人と話して、先進事例を聞きながら、地域にそれをどう還元できるかを考えるようになったことが、コロナ禍の前と今で変わってきたことかなと思います。

藤井：

オンラインでの取り組みも徐々に進んでいるということです。ありがとうございました。

最後ですが、今日見られている方は協力隊に関心がある方、応募しようと検討されている方が多いということで、最後に一言ずつ、短めですがいただいて終わりたいと思います。まずは瀬戸さんからお願いします。

瀬戸：

僕はファーストキャリアとして地域おこし協力隊を選んで、田舎での起業を選びましたが、実は僕は田舎で起業して成功したとは思っていません。実は田舎での起業で向いているのは、成功を志向する起業ではなくて、幸福を志向する幸福志向の起業だなと思っています。成功のためには、ヒト・モノ・カネ、情報など、あらゆる資源を集約することが一つの条件だと思いますが、それが田舎でできるかという、なかなかそれは向いていないのかなと。でも逆に、資源が効率的に集約できないからこそ、リスクを分散していろいろな事業を行っていくことができるという、まさにコロナ時代に向けたフィールドなのかなと思っています。なので、僕とともに幸福志向の起業をされる同世代の方、ぜひ丹波篠山に一度遊びに来てください。

藤井：

ありがとうございます。続いて野一さん、お願いします。

野一：

多くの方は、隠岐の島町、離島と聞くと最新や流行といったワードからはほど遠いところ

なのではないかという印象をお持ちなのではないかなと思いますが、私のゲームと絡めた活動をご覧いただければ分かる通り、隠岐の島町は、こちらが熱意を持って提案したものに対して「よし、行け」と言ってくれる土壌がしっかり整っているところです。なので、面白いアイデアをお持ちの方は、ぜひそのアイデアを、地域と絡めて生かすということが大変やりやすいところですので、そういう方は隠岐の島町にお越しただいて、地域おこし協力隊にぜひ応募してみてください。

藤井：

ありがとうございます。最後西本さん、お願いします。

西本：

地域貢献を目指す上で必要不可欠なことは、地域の人たちにかわいがってもらえることかなと思っていますし、私もかわいがってもらえるように心掛けて活動しています。自分のやりたいことはこの次三の次、まずは地域の人たちの話を聞いて聞いて聞きまくって、そこが自分のやりたいことのスタート位置なのかなと感じています。

もしこのメッセージを聞かれて「これ俺のことかな?」「それ私のこと?」と思われた方がいらっしゃったら、ぜひ一緒に地域おこし協力隊の看板を背負って、地域貢献をしよう、そんな人に向いている仕事だし、そんな人にはとても面白い仕事ですので、「一緒に地域おこし協力隊として地域を盛り上げていこう」というところですね。ありがとうございます。

藤井：

ありがとうございました。サポートデスクでも希望者の相談を受け付けています。検討されている方は一度検索いただいて、ぜひお問い合わせなどいただけたらと思います。以上で終わりたいと思います。皆様ありがとうございました。

司会：

以上でトークセッションを終了させていただきます。皆様ありがとうございました。ゲストの皆様には、後ほど自治体への質問コーナーにご参加いただきますので、どうぞ引き続きご視聴ください。

それではここからのお時間は、地域おこし協力隊の活動事例のご紹介をしていただきます。まず最初は、真庭市役所総合政策部交流定住推進課主幹、小谷佳嗣様、真庭市地域おこし協力隊 OB、また協力隊相談員でもあります松尾敏正様、真庭市地域おこし協力隊員 4 代目リーダー、西本浩史様よりご発表いただきます。なお本日、小谷様、松尾様、西本様は、岡山県からリモートでのご登壇になります。それでは小谷様、松尾様、西本様、よろしくお願いたします。

## 5. 自治体からの活動事例紹介

小谷：

こんにちは。真庭市交流定住推進課の小谷と申します。今日はよろしくお願いします。

松尾：

私、岡山県の真庭市の元地域おこし協力隊で、約7年前に協力隊になりまして、今は現役の協力隊相談員を務めています。松尾と申します。どうぞよろしくお願いします。

西本：

あらためまして、真庭市地域おこし協力隊の西本浩史です。よろしくお願いします。

小谷：

それではまず、真庭市の概要を紹介させていただきます。

松尾：

皆さん、ご存じでしょうか。岡山県の真庭市は、岡山県の北部にあたりまして、鳥取県との県境、中山間地域、山間部になります。真庭市という名前は知らなくても、西の軽井沢とも言いますが、蒜山高原と言えば「知ってる、知ってる」と言われるような高原地帯が広がっています。こちらには蒜山のジャージー牛という牛が、非常に濃厚な牛乳が取れまして、そこでジャージーヨーグルトや諸々乳製品が非常に有名なところでもあります。ここは野焼きという草原を守るために人の手を入れて、サクラソウの自生地ということで、山を燃やして野焼きをする文化もいまだに残っています。

これがダムの下露天風呂ですが、ダムを背景に露天風呂に入れる湯原温泉という温泉もあります。ここは西の横綱という名称もいただいているような結構有名な温泉ではあります。中部に入ると城下町で、勝山町並み保存地区という城下町があります。出雲街道の宿場町で栄えた町です。

ホテルも非常に有名で、真庭市の南部、北房という地域ですが、備中川沿いにホテルの群生地、ホテルがいっぱい飛んでいるところがありまして、ホテルの里としても有名です。何より山間部なので木材の町で、最近で言えばCLTという新しい建材や、木質バイオマスという木材の間伐材や使わなくなった木材を使った発電所などもやって、木材の有効利用、資源の有効利用をしています。

これは隈研吾さんが設計されたCLTの建造物ですが、オリンピックに合わせて東京に置いていましたが、移設されて今度蒜山高原にまた設置されます。これは真庭ビジネスジャーナルといいまして、これこそ関係人口の構築をする一つのコンテンツでもありますが、1泊2日の泊まり込みの合宿が1月30日に開催されます。そのようないろいろな取り組みを積極的にやっている真庭市です。以上です。どうぞよろしくお願いします。



小谷：

真庭市のことを、協力隊のOBさんが、自分ごと、地域の人としてプレゼンしてくださる、これは真庭市の取り組みの一つの結果、形かなと思っています。真庭市、先ほどご覧いただいたとおり、多様な資源を活用して、エネルギーや食料自給率の向上、安心安全な地域づくり、言い換えれば、自治体の基礎体力を上げることにとても力を入れていて、その基礎体力の一つが入づくりであり、関係人口、あるいは協力隊制度の活用なのかなと思っています。

真庭市の協力隊制度の取り組みですので、こちら松尾さん。

松尾：

真庭市は基本的に、行政の方と非常に足並みを揃えているというか、私も現役時代3年間、毎朝のように市役所に行きまして、僕らの仕事はデスクに座る仕事ではなくて地域に出る仕事、地域の住民の方とお話をする仕事を中心にやってきました。その中でも、日々の行政の方のコンセンサスを一番大切にしようと、どういう動きを日々やっているのかということとを共有しながら日々を過ごすというのが、真庭市の協力隊の動きの一番顕著なところかなと。重ねて真庭市の場合は、個人プレー、スタンドプレーするわけではなくて、他の協力隊含めて、一緒に問題を解決したり、一緒に動いたり、なるべくみんなでチーム力を持って動こうということがポイントとしてありました。

西本さんは協力隊制度が真庭で運用されている中に飛び込んで来られた方ですが、どう感じられましたか。

西本：

行政と協力隊員の仲がすごくいいなと思いましたし、今、私も活動する中で、活動の報告をするときも、担当が小谷さんなのですが、いろいろ話を聞いてくださって、そこからどう発展させるかというアイデアをくださり、本当に力強い存在だなと感じました。

小谷：

今9人隊員さんがいますが、市役所に本当にみんな頻繁に寄ってくれています。雑談から人生相談から、協力隊活動、いろいろなことを話しています。真庭市といえば協力隊同士の連携ということで、毎月2回全員が集まって協力隊会議をやっています。こちらでは日々やっている活動を、それぞれ広い真庭市の中でバラバラにやっていますので、そういった活動の共有を行う、そこには私ども真庭市の職員もそうですし、岡山県の職員さん、あるいは市民の方、地域おこしに携わっている方、いろいろな方が自由に参加できる協力隊会議を行っています。ここに至った経緯ですが、どうですか。松尾さん。

松尾：

実は真庭市は2014年に協力隊制度を導入したので、後発型ではあるんですね。その中で、協力隊のいい事例と悪い事例というか、なかなかうまく行かない事例を検証した中で、行政の担当者の方が変わると運用方法が変わって、そこにジレンマが起こるような話が結構いろいろあった中で、僕ら初期世代ですが、なるべく初期世代のメンバーである程度つくって、運用方法としたものを継続して、今でも8年目になってきますが、8年間これが蓄積されつつ動いていく。実際今回小谷さんも異動で協力隊担当になられたというのも、もともと協力隊の他の方がされていたところを引き継いでいく中で、「僕らが今まで運用してきたところはこういう意図でこういうことをしていました」と具体的に運用を伝えられるような取り組みとして、今まで卒業生を含めたら合計で24人になりますが、僕たちが協力隊任期を卒業しても関わり続ける関係性であるような取り組みになっています。

小谷：

松尾さんも日頃から、行政と協力隊がバーサスにならないようにということで話をしてくださっていました。先ほど協力隊のリーダーと言っていますが、リーダーとしていろいろ苦勞もかけていますが、西本さん。

西本：

今、協力隊員が9名いますが、全員が同じ取り組みをしているわけではないので、それぞれの思うことがあって活動しているので、その辺をまとめたりするのもなかなか大変なのですが、ただ、チームで活動するときもあるので、その一体感が生まれたときは、非常に最高だなというときですね。

松尾：

あと真庭市は溜まり場があって、真庭市の交流定住センターという協力隊の活動拠点となる場所があって、南北50キロ、東西30キロ、非常に大きな面積があるのですが、そこに集約されて、みんながデスクワークをするときはここに来るなど、そのようにいろいろと情報共有して、そこに市の方も真庭市の交流定住センターに来ていただいて、一緒にみんなと意思伝達をする取り組みをやっています。

小谷：

真庭市は交流定住のワンストップ窓口として、こちらの交流定住センターを設置しています。交流と定住、その間にある関係人口、今で言うと関係人口ですが、そういう言葉ができる前から真庭のヒトやモノやコトをつないで蓄積して、そして発信していく。それで、外からの応援者、今で言う関係人口さんのハブになる存在、施設としてこの場所をつくり、そこを協力隊の活動拠点とすることで相乗効果を出していこうとしています。本当に顔の見える人、名前の言える人、そういう人を今つくってきていますよね。

松尾：

実はこの交流定住センターが非常にポイントになっていまして、移住者と住民だけではなくて、地元住民の方でも、いろいろ積極的に関わりたいという方となるべくここで接点を持つということ、人と暮らしをつなぐプラットフォームとしての交流定住センターもあります。

今回のテーマの関係人口のお話です。真庭市は5年ほど前から「真庭なりわい塾」というのをやっていました。地元においても移住者の受け皿のやり方や、または、真庭に住んでいない方でも、月に1回真庭に来られて真庭の慣習を学ぶというようなことや、最近新たに始まったのが「真庭ビジネスジャーナル」というのがありまして、合宿をして真庭でリモートワークをするというような取り組みをするということもプログラムとして、いろいろと真庭市交流定住センターはご用意しています。インターネットで「COCO 真庭」、「ココマニワ」と言いますが、検索していただいたら出ます。

協力隊も数多くの市民の方にも知っていただきたいということで、先ほど西本隊員のお話がありましたが、『Pione』という雑誌、この協力隊はこういう取り組みをしていますよというアピールができるような情報誌も発行しています。皆さん真庭にももしご興味があれば、ぜひお声掛けいただければ窓口とさせていただきます。すみません、マイクお返しします。

小谷：

以上で真庭市からの事例紹介を終わらせていただきます。このように真剣に、かつ楽しみながら協力隊制度に、あるいは関係人口づくりに取り組んでいます。お問い合わせをお待ちしています。今日はありがとうございました。

司会：

小谷様、松尾様、西本様、ありがとうございました。パーサスではなく、仲良く進めていくことがとても大事だということですね。たまり場があつていいですね。

では続いては、隠岐の島町役場地域振興課定住推進係定住支援員、野一夢二様よりご発表いただきます。なお本日野一様は、島根県からリモートでのご登壇になります。野一様、よろしく願いいたします。

野一：

トークセッションから引き続きお話をさせていただきます。隠岐の島町役場地域振興課定住推進係定住支援員の野一夢二と申します。よろしく願いいたします。僕は2年目の現役隊員です。

先ほども申しましたとおり、ゲームを中心とした活動をしていまして、かなり特殊なので、ちょっとこのコーナーの趣旨からはそれてしまうかもしれませんが、私の個人的な活動事

例紹介ということでご紹介させていただきます。まず隠岐の島町がどこにあるのかというご紹介ですが、島根県の島根半島から北に 80 キロぐらいの場所にある丸い形の離島になります。日本地図で見ると、日本海に浮いている離島です。

隠岐の島町は人口が 1 万 4,000 人弱いまして、主産業が漁業、農業、林業、第一次産業が盛んな町です。主要施設としまして、港はもちろん空港がありまして、スーパーマーケットも 2 軒あってドラッグストアも 2 軒あると、皆様の想像される離島というイメージからはもうちょっと栄えているかなというような町です。

私のゲーム関連の活動ということで絞ってご紹介します。まず一つ目が、『ドラゴンクエストウォーク』というゲームの環境整備です。これは位置情報ゲームで、全国でランドマークと呼ばれる特定のスポットを訪れると、地区限定アイテムがもらえるという仕様があります。島根県ですと、松江城と稲佐の浜と石見銀山と隠岐の島町の 4 点ですが、隠岐の島町がランドマークに選ばれていたのはいいのですが、ランドマークに使われている写真が、観光スポットであるローソク島という隠岐の島町の有名なスポットなのですが、その写真を使いながら、旧役場庁舎にランドマークが置かれていて、これは隠岐の島町のリサーチが多分足りていなかったのではないかと思うのですが、そういう細かいミスなどがありましたので、スクウェア・エニックスさんに連絡を取りまして、ここがいいかなと協議しながら、現在五箇地区という島の北の地区にある隠岐郷土館という場所へランドマークを移転するような活動もしました。

もう 1 個が『Pokemon GO』の環境整備です。これは皆様ニュースなどでご覧になっていると思いますが、隠岐の島町はポケストップが 120 個ぐらいあったのですが、そのほとんどが西郷という島の南の港のある栄えた地区に集中してしまっていて、隠岐全域で遊ぶことができなかつたような状態でしたので、このポケストップを倍の 240 個に増やしまして、隠岐の島全域で遊べるように調整しました。

先ほどのトークセッションでも申しましたが、今年の活動で一番大きかったのがこれかなと思っていますが、東方隠岐誉という地域の酒造会社さんとコラボした新しい特産品になります。『東方 Project』という世界的に有名なゲームがありまして、このゲームに隠岐の島町に伝わる舟幽霊の民話をモデルにしたキャラクターが登場していることが発覚しまして、発覚と書いたのは、僕は移住してくる前はこのキャラクターの存在を知らなくて、移住してきてから知ったのですが、左に書いてあるこのセーラー服の女の子がそのキャラクターです。このキャラクターをパッケージにした日本酒を、地元の酒造会社さんに頼んで、右上の写真の左に書いてあるコースターも島の木材組合さんに依頼しまして、パッケージのイラストを島在住のイラストレーターさんに描いていただきまして、そのような感じで島にいる方々、島にある特産品だけで組んだ日本酒のセットを限定 100 セットで販売しましたところ、平日の昼間にもかかわらず、ありがたいことにわずか 4 分で完売の運びとなりました。

これの広報に使っていた隠岐の島町の地域おこし協力隊の Twitter のフォロワーが、な

んと 100 人から 1,600 人の 16 倍に増えまして、この数は単純なフォロワー数だけではなくて、フォロワーとフォロワー数の比率で見たときに、日本中の地域おこし協力隊アカウントでもトップクラスとここに書いてありますが、多分日本のトップなのではないかなと思っています。というような実績を上げて、今年ゲーム業界で話題になった事業です。

3年目の活動の予定ですが、冒頭の自己紹介で少し申し上げましたが、国境離島初のボードゲームカフェ「Cachette」、これはカセットと読みますが、フランス語で隠れ家という意味のボードゲームカフェを開店しようと考えています。ボードゲームカフェとは何だろうということですが、いわゆる Nintendo Switch やスマホなどではなく、そういう電源を使わないゲーム、非電源ゲームと言いますが、こういったものを世界中から集めまして、遊び放題とした時間貸しスペースのことです。一例として右上に写真を載せていますが、これは滋賀県にある hello coffee stand さんというボードゲームが遊べるバーということで活動されている方のお店で、壁一面にボードゲームが並んでいます。訪れたお客さんはここから好きなものを取って遊び放題というお店です。私は、それにフリードリンク、フリーWi-Fi、フリー電源といったサービスを設けて、コワーキングスペースがないという隠岐の島町の課題を解決するために、コワーキングスペースとしての運用が可能なボードゲームカフェということで開店しようと思っています。

隠岐の島町のもう一つの課題である、雨の日や冬の時期の観光客が激減しがちという課題がありまして、これに対するアンサーとして、室内でのアクティビティ、離島に来てボードゲームを三日三晩遊んで帰るみたいな、そういう新しい観光プランをつくれないうことで、室内アクティビティをつくらうということでも役に立つのではないかなと思っています。私は来年任期3年目を迎えますが、当然平日は活動がありますので、初年度は土日祝日のみの営業ということで運用しようと思っています。

最後ですが、僕はやっぱり自分がゲームの専門家ということもありますので、隠岐の自然もアクティビティもうまく紹介することができません。けれども、日本の国境離島隠岐の島町にエンターテイメントの光をもたらし続ける活動をこれからも続けて、ゲームで地域のために貢献していこうと思っています。もし隠岐の島町、並びに僕の活動に興味湧きましたら、ぜひ隠岐の島町の地域おこし協力隊に応募してみてください。ありがとうございました。

司会：

野一様、ありがとうございます。ポケストップを巡る旅に出たいと思います。おいしいお酒をいただきながらボードゲームもしてみたいです。ありがとうございます。

続いては、丹波篠山市企画総務部創造都市課定住促進係係長、垣内由起子様よりご発表いただきます。なお本日垣内様は、兵庫県からリモートでのご登壇となります。垣内様、よろしく願いいたします。

垣内：

よろしくお願いたします。丹波篠山市創造都市課の垣内です。私からは、丹波篠山市の地域おこし協力隊について紹介させていただきます。

まず初めに丹波篠山市についてですが、兵庫県の南東部に位置し、人口4万1,000人、大阪から電車、車で1時間程度、神戸、京都からは1時間半程度の立地にあります。昨年5月1日に市名を篠山市から丹波篠山市に変更しています。丹波篠山の特産物としては、丹波篠山黒豆・黒枝豆をはじめ、豊かな農作物を育む気候風土に恵まれ、日本六古窯の丹波焼などの伝統工芸の息づくまちとなっています。

農作物をはじめ、農村風景や古いまちなみなど、先人の遺産を生かして継承するまちづくりを目指しています。例えば古民家を活用した宿泊施設といった事業を実施しています。このような取り組みは、二つの伝建地区、二つの日本遺産、また、ユネスコの創造都市ネットワーククラフト&フォークアート部門に加盟するなどの結果に結びついています。

丹波篠山市の地域おこし協力隊は、地域活動に参画・従事しながら、地域資源を活用して市内で研究または起業し、その成果を地域に還元しようとする若者を委嘱し、住民組織であるまちづくり協議会に配置しています。コーディネーターがまちづくり協議会や市と連携し、隊員の活動や生活を支援しています。また、まちづくり協議会もカウンターパートを選任して、隊員の地域での活動や生活を支援し、また、隊員と一緒に地域づくりに取り組んでいます。

丹波篠山市の協力隊は、神戸大学との官学連携事業の人材育成プロジェクトをベースに運営しています。隊員は二つに分かれています。まず半学半域型、こちらは大学生、大学院生、または大学の研究員で、地域活動に参画・従事しながら、地域課題の解決に向けた研究を行う隊員です。週3日活動、最長任期が3年間となっています。起業支援型の隊員は、地域活動に従事しながら、地域資源を活用したビジネスでその成果を地域に還元できる起業を目指す隊員で、週5日の活動、最長任期が2年間となっています。先ほども申し上げたとおり、丹波篠山市の地域おこし協力隊は、神戸大学との官学連携の事業の一環としてスタートしていき、平成26年度から学生隊員3名でスタートしています。これが今の半学半域型の協力隊員の基礎となっています。

神戸大学との連携の歩みについてですが、1949年に神戸大学の農学部の前身である兵庫県立農科大学が丹波篠山市で開学したのをきっかけとしています。2006年に活動拠点である丹波篠山フィールドステーションを開設しまして、翌年神戸大学の農学部と地域連携協定を締結しています。

2008年に半学半域型の協力隊員の活動につながる食農コープ教育プログラムが始動し、2010年には大学全学と地域連携協定を締結しています。2014年から協力隊制度がスタートし、2016年に起業支援型のベースとなる農村イノベーションラボを開設しています。

神戸大学では、実践農学入門や実践農学という授業を実施されていき、このことによって、農村にちょっと興味があるというライト層の学生が毎年一定数市内の農村を頻繁に

訪れて活動する仕組み、授業があります。授業を受講した学生さんたちは、学生サークルをつかって引き続き農村ボランティアの活動をされていますが、その学生の中で、さらに地域で活動してみたいという学生さんが、半学半域型の地域おこし協力隊として活躍していただいています。

続いて、起業支援型の協力隊についてですが、丹波篠山市では平成29年度から神戸大学と一緒に篠山イノベーションズスクールを開講しています。こちらの篠山イノベーションズスクールは、主に市外の方を対象とした通学型のローカルビジネス起業スクールです。スクールの卒業生が農村で起業を実践する場として、起業支援型地域おこし協力隊を運営しています。また、スクールの卒業生だけが協力隊になるわけではないので、協力隊の起業をサポートする場としてイノベーションズスクールを活用して隊員を支援しています。

イノベーションズスクールは、このような少数型の授業を実施しています。神戸大学との官学連携事業が丹波篠山市の協力隊制度のバックボーンであり、また同時にサポーターとなっていていただいています。これまでの丹波篠山市での協力隊の隊員数は18人、うち学生の隊員さんが7名となっています。現在6名の隊員の方が活動されています。隊員の活動拠点としまして、丹波篠山フィールドステーションを設置しています。また、このフィールドステーションにコーディネーター4名が常駐して隊員を支援しています。毎週月曜日に隊員の定例会を実施しており、隊員間で活動の共有や助言をし合ったり、コーディネーターからアドバイスを受けていたりしています。

隊員経験者のOB・OGさんのその後ですが、いろいろな活動を引き続き市内ですべていただいています。就農と狩猟の活動をされている方や、古民家を活用したゲストハウス、また猟師の技術を生かして解体所やジビエの販売をされている方、また先ほども登壇されましたが、協力隊のコーディネーターとして後進の支援にあたっていていただいている方などがいらっしゃいます。

現在活動中の6名についてですが、児島隊員は、日置地区で空き店舗を活用した地域交流拠点でパン屋さんを開設しています。彼は今年2年目の隊員になります。廣川隊員は大山地区の方で活動されている隊員になりますが、彼はもともとパーマカルチャーというものに興味がありまして、それと大山地区のまちづくりの理念にひかれて、遊休農地を活用した活動を展開されています。今年から活動をスタートされています。

谷木隊員は西紀北地区で活動されています。彼女はイノベーションズスクールの卒業生で、スクールをきっかけに協力隊員になっています。ハーブの知識があり、その技術を生かして、ゲストハウスの運営を目指して遊休農地の活用などをされています。

佐藤隊員もイノベーションズスクールの卒業生で、スクールの受講時代に関わった大芋小学校の廃校事業をきっかけに協力隊員になっています。現在も地域が運営される廃校活用事業「大芋泊まれる学校」の事業に活動としてたずさわっています。

福住地区の仲田隊員は、古民家を活用した移住促進などをやるような、交流型ゲストハウスの運営を目指して活動しています。その他地域での子育て支援事業にも参画されていま

す。

雲部地区の花谷隊員は、現在唯一の学生隊員になっています。こちらも廃校を活用したコミュニティカフェになりますが、地域の方が運営されているコミュニティカフェの運営を手伝いながら、人文地理学の研究をされています。

現在はこういった6名の隊員と一緒に活動しています。また集合写真には、コーディネーターや隊員のOG・OBなどが一緒に写っています。こういった形で、みんなで和気あいあいと活動していただいています。

丹波篠山市の地域おこし協力隊は、毎年8月から9月に次年度に委嘱する隊員を公募で募集しています。官学連携のことをご紹介しましたが、神戸大学生、イノベーターズスクール生でなくても応募できます。また、応募期間外でもお問い合わせや見学などは大歓迎ですので、コーディネーターまでぜひご連絡をいただけたらと思っています。お問い合わせ先は、こちらにお気軽にお問い合わせください。また、協力隊や神戸大学との連携事業については、ご覧いただいているホームページでもご紹介していますので、よろしければこちらも見ただけたらと思います。ぜひまた丹波篠山市へお越しいただけたらと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

司会：

垣内様、どうもありがとうございました。丹波篠山市と言えば、まさに私の知人も都市部からそちらに移住してしまして、住みやすいと申しています。お世話になっております。ありがとうございました。

それでは、ここでTwitterに寄せられましたご質問について、協力隊員の皆様からお話をお聞きしていきたいと思えます。それでは藤井様、よろしくお願いいたします。

## 6. 参加者による自治体への質問コーナー

藤井：

よろしくお願い致します。それでは、Twitterに寄せられた質問を皆さんからお話ししたいと思っています。

まず「協力隊の業務は自治体により様々だと思えるが、隊員を採用するにあたりどのような資質を求めているか」という質問が来てしまして、これは僕から答えようと思えます。協力隊、自治体によって本当に制度の運用など様々です。内容も様々なので、もちろん起業を求めているところもあれば、地域支援を求めているところもあるし、いろいろなパターンがあります。ただ、これまでの話を総括すると、行政や地域など、全然文化が違うところに行くので、そういう環境をつくる力、行政と地域ですね、環境をつくる力が要るのかなと僕は思っています。自治体によって様々なので、本当に何が必要かというのは、ある意味自治体の皆さんにそれぞれ聞いていく必要もあるかと思えます。何が求められているかというのは、募集内容だけではなかなか読み取れないところもあるので、その辺りはぜひ各自治体に



お問い合わせさせていただきたいと思っていますし、サポートデスクもその辺りをお答えすることもできます。また、各県 OB の組織みたいなのがありまして、ネットワーク、組織というのがある県、ない県ありますが、あるところもあるので、ぜひそういったところもお問い合わせいただいて、協力隊の自治体の様子や、逆にどういことを求められているかの本当の部分を知っていただけたらいいかなと思っています。

あと、事前の体験、1泊2日など、いろいろ体験プログラムみたいなものを事前に持っている自治体、真庭市さんは今回なりわい塾というのをご紹介いただきましたが、そういったところもぜひあるかどうか聞いて、事前に自治体に行って、ぜひ確認させていただきたいなと思っています。

続きまして二つ目の質問に行きます。「家族で移住を考えているが、そのような場合でも受け入れができますか」という質問が来ています。これについては、瀬戸さんが協力隊のサポートをされていると思いますが、そのような方々はいらっしゃるでしょうか。

瀬戸：

実際に先ほどの事例紹介の中でありました協力隊6人いるメンバーの中で、家族で来ているのが現役では1名、直近のOBでも1名いらっしゃいました。その方々は、ともに旦那様が協力隊になったということをきっかけに、奥様と一緒に移住されてきているというパターンです。協力隊になれるのは1人であったとしても、もちろん移住するという意味でいろいろな支援が協力隊制度にはあるので、それをご夫婦、ご家族一緒に使っていただくのは可能だと思います。北海道の事例だったと思いますが、知り合いの協力隊の方で、夫婦一緒に協力隊になったという方もいらっしゃいますので、その辺りは臨機応変に対応可能だと思います。

藤井：

ありがとうございます。続きまして三つ目の質問に行きます。「活動は一人でしていくのか、それともチームで活動していくのか」という質問ですが、先ほど西本さんから、チームでという活動は真庭ではあるという話で、もちろん一人もチームもあると思いますが、チームで活動するところと一人で活動するところがあると思いますが、実際のところはどのような感じでしょうか、西本さん。

西本：

実際のところ、一人で入っていくこともありますし、他の隊員と一緒に共同のプロジェクトを組んでいて一緒に入ることもあります。なので、一人で活動するということに関して言うと、それぞれなのかなと思いますし、もちろん地域に入れば、地域で一人で活動することはほぼないと思います。地域に入るといことは、地域の方と一緒に活動することになるので、協力隊はそういう部分で言うと、ほぼ一人では活動しないのかな。チーム、地域の方と

のチーム、それから協力隊員として一緒にチームを組んでやるという活動になると思います。

藤井：

ありがとうございます。拠点がある自治体もあるし、そうではないところもあるし、OBがいるところ、いないところ、それぞれありますから、その状況をぜひ皆さん把握した上で行っていただきたいなと思います。

続きまして次の質問に行きたいと思います。「業務時間や1日の活動内容を知りたいです」というのが来ていまして、実際の活動がどのような感じの時間割で進んでいくのかというイメージを聞いているのだと思いますが、これについては野一さん、いかがでしょうか。

野一：

先ほど藤井さんから、自治体によって色々だということがありましたが、隠岐の島町は行政と雇用契約を交わすことになりますので、準公務員という働き方になります。実際にタイムスケジュールもほぼ公務員どおりと言いますか、8時半から17時で昼休憩1時間の7時間半労働になります。月17日労働、大体週4日ぐらいで活動しています。僕の例ですが、行政仕事と個人的な活動のフィフティーフィフティーぐらいで活動しています。というのも、2年目だからそうなのであって、1年目はもうちょっと行政寄りの仕事が多く、3年目は逆に個人の活動が多くなります。活動内容だと、行政仕事はもちろんトップダウン、上からある仕事が降ってくる感じですが、個人的な活動はボトムアップ、自分で企画したものを自分でタイムスケジュールを組んで動くという形が主な働き方になります。

藤井：

ありがとうございます。これはリアルな状況としては、例えば瀬戸さんは隊員期間中はどのような感じでしたか。

瀬戸：

うちに関しては、行政の庁舎に行ったり、デスクが用意されたりという状況ではなかったんですね。今もそうではないのですが、なので、基本的にセルフマネジメントというか、自分で1日のスケジュールを組めるというような形でした。その中で、もちろん日報はつけていて、週1回ミーティングで、1週間こんなことをしましたということを報告します。

例えばある1日だとすると、本当に勤務時間も丹波篠山市は自由だったので、朝7時半ぐらいに地域の方がされている野菜の朝市の現場まで行って、そこでいろいろな情報交換をして、お話をして1日が始まって、午前中いっぱい事務作業して、昼ごはん地域の方と食べて、昼から打ち合わせに地域の外に出て営業活動するなど、「朝7時半から働いたし、今日は早めに切り上げようかな」というので、プライベートの時間を過ごすというような形で、

本当に自分で裁量を持って働けたなという印象です。

藤井：

ありがとうございます。これも自治体ごとでいろいろということですが、自分で活動内容や時間を組み立てるということは、協力隊には必要な力なのかなと思っています。

次の質問に行きたいと思います。これは最後の質問で「移住した際の住居、住むところ、これをどのように探せばいいですか」という質問があって、これはほとんどが自治体の皆さんが準備してくれるものだと思いますが、協力隊として皆さん住んでいる場所、活動の地域内なのか外なのか、もしくは例えば古民家なのか市営住宅なのか、いろいろなパターンがあると思いますが、例えば西本さん、住んでいる場所や住居はどのような感じですか。

西本：

どのように探せばいいかというところですが、先ほどの真庭市の事例紹介でもありましたが、真庭市交流定住センターがワンストップでいろいろと移住のことも、協力隊のこともそうですし、受けてくださっていますので、移住をしてくるタイミングで、何か困るな、ここどうしたらいいのかなという際は、この真庭市交流定住センターに、真庭市の場合は聞いてもらえればいいかなと思いますし、多分他の自治体もそういったところがきっとあるはずなので、まずは調べていただければいいのかなと思います。

藤井：

ありがとうございます。自治体によってこれも様々ですが、移住される際には自治体の皆さん、どこに住んでもらおうかというのは想定しながら進めていくと思いますので、ぜひ1回協力隊になる前に行っていただいて、自分が住む家はどれなのかということを確認いただいて、応募していただくのがいいかなと思っています。それでは質問を以上で終わりたいと思います。3名の方、ありがとうございました。

司会：

質問コーナーでした。皆様、ありがとうございました。ご講演の皆様、今日はありがとうございました。以上をもちまして、「地域おこし協力隊・関係人口ミニサミット」オンラインシンポジウムを終了させていただきます。

以上